

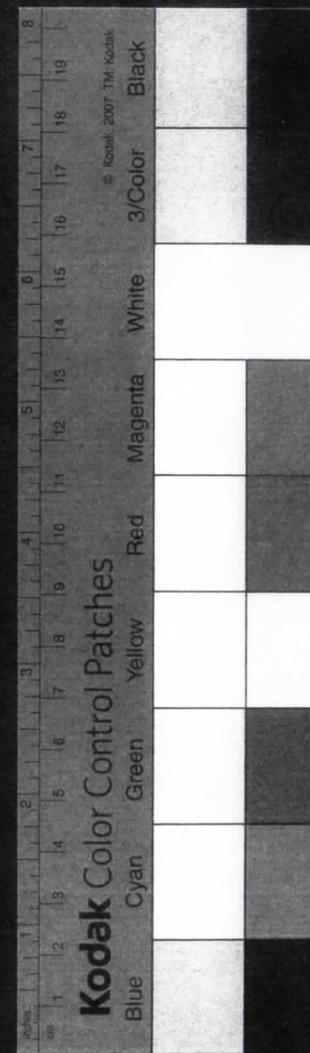


Z5-24
(602)
N 2000.7



12.7.26
図書館

2000
JUL
No.602



COM

© Kodak 2007 T.M. Kodak

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

戦前の東京・横浜にあつたホテル点描①

ROUSUI-RO HOTEL.

望翠樓ホテルについて

外国人居留地比較研究グループ

はじめに

われわれグループは、これまで、日本のホテル史の初期について

研究を重ね、本誌にその成果を発表して来た。
日本のホテルは、横浜、長崎、函館（神戸）、大阪、東京および新潟が開港または開市され、外国人居留地が設定されて（新潟では居留地ではなく、外国人は日本人と一緒に「難居」した）、多数の外国人が日本にやつて来るようになつてはじめて開業したといつてよい。したがつて、われわれグループは、この7つの都市につき、開港または開市から、1869年（明治2年）7月の条約改正により、開港・開市場が全部撤廃され、外国人居留地も消滅したまでの数十年間につくられたホテルにつき研究してきしたものである。

ちなみに、7つの都市は次の時期に開港または開市となった
1859年7月1日（安政6年6月2日）横浜、長崎および函館
が開港

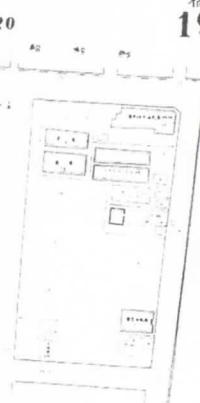
1868年1月1日（慶應3年12月7日）神戸、大阪が開港（大阪は当初は開港となり、8ヶ月後に開港に改められた）

1869年1月1日（明治元年1月19日）東京が開港、新潟が開港

開港場では埠頭、税関といった貿易に必要な施設が設けられるが、開港場にはそのような施設がなかった。東京にいた外国商人は、横浜の施設を利用したのである。

いずれにせよ、われわれグループのこれまでの研究対象は、7都市にあったホテル。横浜などでは1859年7月から1869年7月までの10年間、神戸・大阪については1868年1月から1869年7月までの31年半、東京・新潟については1869年1月から1870年7月までの30年半につくられたホテルであった。われわれは主として極東、とくに日本にいた外国人を網羅した外国人名録（香港や横浜で毎年発行されていた）に準拠し、他の内外の資料を参考に、あくまでも実証主義的な研究を目指した。

京橋 19



20



東京については、これまで、前述のように1869年から1899年までの期間に開業したホテル。最初は築地に建設された外国人居留地やその周辺につくられ、やがて居留地域外にもオープンするようになった。を取り上げた。われわれグループは、今後は居留地制度廃止後、第一次大戦の勃発までの東京と横浜につくられたホテルに研究対象をひろげる。今月号の本誌に発表させて顶く。又は居留地廃止後の東京にあたるホテルの一つに関するもので、われわれの研究の最初の成果である。研究にはあくまでも実証的態度を貫いたつもりであるが、まだ不備な点もある。今後、少しずつ研究を深め、正確さを高めて行きたい。

今回は、大森にあつた望翠樓ホテルを取り上げるが、まず、これまでの研究成果をわかりやすく表にまとめたのを御披露したい（付表）。実際には、1915年（大正4年）開業の東京ステーションホテルまで掲げた。ある時期までは築地居留地にホテルが集中していたが、築地精養軒ホテルは築地居留地域外にあつたが、居留地にさわめて近接していた。次第に東京の他の地域、現代の区制では千代田区、台東区、港区、大田区、中央区、にもホテルが開業するようになつたことが明かとなるであろう。

付表は、外国人居留地比較研究グループのある協力者（川崎晴朗）が本稿とは関係なく独立して作成した。

（付表に加えておくが）この付表は完成の域に達していない。それは、ひょいと資料がわざめで不十分なためである。例を挙げよう。鉢木清方は、1931年（昭和6年）9月に発表した『築地用一』で次のふうに述べている（この随筆は、山田翠翠（山田翠翠）による）。

付図 1932年（昭和7年） 1936年（昭和11年）の京橋区明石町
(出所) 東京都中央区立図書館編・刊「中央沿革図集 京橋編」(1996年)

治の東京
(石波文庫、1989年) の88ページに収められています)

田村病院は今もあるが、そのなりびにホテル・オリエントルカがあった

田村病院は、1899年7月に染地居留地が廢止されたあと、三番地31番(京橋区明石町31番地)の部につくられた病院である

したがって、ホテル・オリエントルカは同じ明石町31番地あるいは31番地に隣接する同町30、32、33または34番地にある。たゞ記される付図は、1930年代の京橋区明石町の一部を示すもので、田村病院はあるが、ホテル・オリエントルカはない。同ホテルは、あるいは三番地33番(のち明石町33番地ノ1)にあった東京ホタルの後身かと考えられるが、何の関連資料も発見されていない。

翠樓ホテルについて

翠樓ホテルのあつた大森入新井の高台は、関東大震災後に人口が急増し、宅地化が進んだが、それまでは静かな田園地帯であった。翠樓ホテルはこのころ駅前の街を抜けたのである。

現在の大田区は、1917年(昭和22年)7月1日、大森区と蒲田区が合併して成立した。現在の大田区成は、明治初年東京府荏原郡に編入されたが、17の村が算在していたといふ。1889年(明治22年)10月1日、りヶ村(現:大森)にめられたが、のち翠樓ホテルが建設されたあたりは入新井村といつた。1897年(明治30年)から

あるが、正確なアドレスは不明。

この版から大森ホタルが登場。所有者イノハラ「大森」の項に

1920年版 306ページ

1921年版 218ページ

1922年版 380ページ

1923年版 180ページ

1924年版(保存されていない)

1925年版(保存されていない)

1926年版(68ページ)

1927年版(68ページ)

1928年版(68ページ)

1929年版(68ページ)

1930年版(68ページ)

1931年版(68ページ)

1932年版(68ページ)

1933年版(68ページ)

1934年版(68ページ)

1935年版(68ページ)

1936年版(68ページ)

1937年版(68ページ)

付表

東京にあった初期のホテル(1915年までに開業したもの、印は築地居留地の域内にあった)

付表作成者 川崎昭明

ホテル名 (カタカナは英・仏名)	アドレス	開業	閉業
築地ホテル館 (Yedo Hotel)	軍艦保津所跡	1868年8月16日 (慶応4年6月28日)部分的に開業	1871年12月31日(明治4年11月20日)休業、その後焼失
オーベル・デ・コロニー (Hotel des Colonies)	南小田原町3丁目、のち居留地18番	1869年2月また13月	1872年1月3日(明治5年3月26日)焼失
ヨドホテル (Yedo Hotel)	相対借り地域、のち居留地17番A	1872年後半	1879年(明治12年)1月19日焼失
オーベル・デ・コロニー 再建	新堀町5丁目6~8番地、のち居留地18番	1873年(明治6年)後半	1875年(明治8年)
オーベル・デ・クラン・ヴ・テル (Hotel du Grand Vatel)	新堀町5丁目3番地	1871年(明治7年)ころ	1875年(明治8年)ころ
東京ホテル (Tokyo Hotel)	居留地33番A	1871年(明治7年)	1882年(明治15年)初頭
築地精養軒ホテル (Tsukiji Seiyoken Hotel)	采女町32、33番地	1876年(明治9年)6月	1923年(大正12年)9月14日
東京ホテル (Tokyo Hotel)	日比谷門見付 (麹町区有楽町3丁目2番地)	1887年(明治20年)6月23日	1899年(明治32年)3月以前
クラブ・ホテル (Club Hotel)	居留地1番	1890年(明治23年)5月	1892年(明治25年)または1893年(明治26年)
帝國ホテル (Imperial Hotel)	越町區内山下町口丁目1番地	1890年(明治23年)11月3日	
ホーリ・メトロポール (Hotel Metropole)	居留地1番 (明石町1番地)	1892年(明治25年)または1893年(明治26年)	1909年(明治12年)7月
オーベル・サンタラ (Hotel Central)	明石町32番地、のち明石町12番地	1901年(明治34年)	1920年(大正9年)末ころ
上野精養軒ホテル (Ueno Seiyoken Hotel)	上野公園	1902年(明治35年)	1917年(大正6年)10月11日
ホテル愛宕館 (Hotel Atago-kan)、のち東京ホテル (Tokyo Hotel)	芝園愛宕山	1902年(明治35年)ころ	1911年(大正3年)ころ
望翠樓ホテル (Villa Belvedere、のちBosui-ro Hotel)	大森新井宿	1912年(明治45年)6月	1931年(昭和6年)または1932年(昭和7年)
日比谷ホテル (Hibiya Hotel)、のち東京ホテル (Tokyo Hotel)	麹町區有楽町1丁目3番地	1912年(大正元年)12月以前	1919年(大正8年)ころ
東京ステーションホテル (Tokyo Station Hotel)	東京駅構内	1915年(大正4年)11月21日	

翠樓ホテルについて

翠樓ホテルのあつた大森入新井の高台は、関東大震災後に人口が急増し、宅地化が進んだが、それまでは静かな田園地帯であった。翠樓ホテルはこのころ駅前の街を抜けたのである。

現在の大田区は、1917年(昭和22年)7月1日、大森区と蒲田区が合併して成立した。現在の大田区成は、明治初年東京府荏原郡に編入されたが、17の村が算在していたといふ。1889年(明治22年)10月1日、りヶ村(現:大森)にめられたが、のち翠樓ホテルが建設されたあたりは入新井村といつた。1897年(明治30年)から

あるが、正確なアドレスは不明。

この版から大森ホタルが登場。所有者イノハラ「大森」の項に

1920年版 306ページ

1921年版 218ページ

1922年版 380ページ

1923年版 180ページ

1924年版(保存されていない)

1925年版(保存されていない)

1926年版(68ページ)

1927年版(68ページ)

1928年版(68ページ)

1929年版(68ページ)

1930年版(68ページ)

1931年版(68ページ)

1932年版(68ページ)

1933年版(68ページ)

1934年版(68ページ)

1935年版(68ページ)

1936年版(68ページ)

1937年版(68ページ)

「1922年版 186ページ

「1928年版 172ページ

「1929年版 628ページ

「1930年版 636ページ

「1931年版 706ページ

「1932年版 726ページ

「（保存されていない）

「1933年版 31年版では望翠樓ホテルは載っていない 大森ホテルは掲載されている（606頁）」

「1934年版 12年版を見たが、やはり翠樓ホテルはなく、大森ホテルは有載している（それぞれ52頁、676頁）」

「以上がジャパン・ガゼット人名録にある翠翠樓ホテルの全記録である。」

ある。1932年版が保存されていないため、このホテルが記載されなくなつたのが1932年版か1933年版のいずれであるか判明しない。前者であれば1931年（昭和6年）、後者であれば1932年（昭和7年）または33年（昭和8年）の開業であろう。

筆者は、ジャパン・ガゼット人名録により、大森に翠翠樓という名のホテルがあつたことを知り、そして、1919年版に初登場するので、1918年（大正7年）に開業、また1931年ないし1933年に閉業したのである。と想像した。そして、1926年版から大森ホテルが人名録に掲げられるので、1925年（大正14年）ころ、同じ大森にもう一つホテルが開業し、翠翠樓が営業を始めたとも推測している。あるいは、このホテルは戦合関係にあつたのかも知れないな、などと思つた。当時はそれ以上の情報はなかなかのうちに述べるようだ。筆者は大森山の生まれである。

望翠樓ホテルのことは、それ以降すつと筆者の脳裡に残り、いずれもじとじと調査したいといふ気持ちが消えることはなかった。

＊

＊

＊

人田区史編さん委員会編の「人田区史（東京都大田区刊）」が最近刊行の速びとなつた。1996年刊行の下巻を読んでみると、第5章「大正期の大森・蒲田・羽田」の第六節に、「大森丘の会のことは」という小節があるのに付いた（5356頁）。この第六節第五節は筑波大学の大演説也教授および大田区歴史研究会の山本定男会長が執筆されたものであるが、「大森丘の会のことは」に翠翠樓ホテルのことが出てくるのである。

少し長いか、要点を再録させて頂く。

翠翠樓ホテルは、大森駅西口の丘の上にあり、明治末から大正期にかけ、麻布の電車軒、日本橋のレストラン、ユーノス、銀座のブランタン、数寄屋橋の館などとともに、若き芸術家たちが種々な会合をもち、新時代の文学・芸術運動の発信地として名をなしたひとつのである。

ホテルは、大森天祖神社の南西、新井宿裏石山の高台（現山131日31番）にあって、大正九年（1920年）に建てられた洋館2階建ての客室20室初め浴場・便所を備え、當時にしてはほんの他に類を見ない高雅なホテルであった。食事その他、いわゆる西洋式で、食堂は後に100人を収容する設備があり、庭園も広く、特に眼下に東京湾の翠色を【翠】におさめ、まさに翠翠樓の名に背かない感じがわかる。ここでは、馬込村に文士たちが集まつてゐる前に、近隣の芸術家や知識人たちが「大森丘の会」と名づけて度々会合していた。会合についても堅苦しくない。

しかし、ジャパン・ガゼット人名録にこのホテルがはじめに掲げられるのは、前述のように1919年版であり、この事実から言えると、開業は1918年（大正7年）のことになると人田区史のいう1912年より五年おき。

＊

＊

＊

（詩人）長谷川謙（洋画木版画家）片山彦子（歌人、翻訳家など）を挙げる。それは、1918年（大正7年）以前の情況であつたらし。日夏歌之助が、この大森丘の会とは「音楽家は時人と伍し、小説家は純説家に交つてゐた」云々と書いてゐるところによると、この場所を開業したことである。

それでは、翠翠樓ホテルはいつ開業して、いつ閉業したのであるか。大田区史は「大正九年（1918年）に建つられた」として御高承の通り、1912年7月30日、明治天皇が崩御、大正天皇が即位、この日から「大正時代」がはじまる。大田区史をそのまま読むと、ホテルは大正九年の後であるから、それは1912年3月31日ないし同年末までの期間のいつか、といふことになる（1912年7月30日までは明治15年である）。また、大田区史は、翠翠樓ホテルがいつ営業を停止したのかの点にはふれていない。

「開業」 英語名は「(江ノ)ホテル」(Yachō Hotel) であった。
筆者は、築地ホテル館について、報通に今覽を含むさまざまな資料を基礎にして研究し、その集成を、(Hotel Reviewの1992年1月、7月号に発表したが)このホテルが最初は、外国人旅館として称され、建設が進められた事実にも、開業当時の日本では「ホテルは外国人用の旅館」とぞ思られていたことが端的にあらわされていると思つ。

3

それはともかく、望翠樓ホテルが1911-2年の発足にせず、1918年のスタートにせず、筆者は、いまでは、これは本来は外国人向けに建設されたホテルであった、と考へている。築地ホテル館のつくられた幕末維新当時より10数年、もちろん日本の芸術家知識人もあちこちのホテルを社交の場として(文学・藝術運動の発進地)として利用するようになっていたしかし、筆者は、望翠樓ホテルは、基本的に外國人のため建設され、経営されたものである。

このあたりに基づき、筆者は、開業は開業は、當時の The Japan Timesをマイクロフィルムで閲覧することとした。東京で倒門されたもので、望翠樓ホテルのように東京にあったホテルなら、外国人のために広告を出しているのではないか、あるいは開業、閉業、撤張を中心としたつき記事になっているのではないか、と考えたのである。

結論からいえば、望翠樓ホテルは、1911-2年6月13日付 The Japan Timesにはじめて(広告)掲げられている。ただし、ホテル

通りつけ、葉ふりながらおしゃべるのであらう。

「Belvedere」は本来はイタリア語で、「展望台」という意味である(' vedere' は見る)の意。Vetusta Belvedere は「展望台」 英語にはな、たのは16世紀末で、意味は同じである。大森の高台、少なくとも明治本ないし天正はじめの、少なくとも1921年(天正12年)9月の関東大震災までの、は、たしかに「展望台」だったのであらう。日本語のホテル名「望翠樓」も同じ趣旨つけられたのであらう。このホテルの広告には、Belvedere(望翠樓)、そして、櫻は(Cherry blossom)を意味するという解説付きのものが多いが、まさに眼鏡に東京湾の景色を、おこにめぐめる高台のホテルであったと思われる。

「かし」、ホテルは英語名「Villa Belvedere」(1911-2年6月13日付)登場したが、前述のように、時間錯誤され、1911-3年1月20日、Belvedere Hotel(望翠樓)再出発する。筆者からはそのように読める以上、The Japan Timesに載った広告を見せて行きたい。筆者には、筆者のホテル史研究にしばらくおつき合いをお願いしたいのである。

4

筆者は、望翠樓ホテルがジャパンガゼット人名録に記入はなされず、1911-9年版になって掲げられたため、このホテルは、当初は日本人向けであつて、外国人向けの設備はなかつたかも知れない。しかしながら、念のため国会図書館で1911-7年のThe Japan Timesを借りたところ、ホテルの広告がわんぱくに出でる。(例えば、1月3日、6日、8日、11日、12日、15日、20日、22日、

名は Villa Belvedereである。日本語ではそのころから「望翠樓ホテル」

だったのであるか。1911-2年6月13日付の英字新聞に広告が載つたということは、その数日前か10数日前に開業したということであるか。いずれにせよ、1911-2年6月はまだ明治15年である。すいぶんのは、大田区史が「人庄尾元に建てられた」といつてゐるのは誤りであり、明治15年(1911-2)にすべきであるといふ点である。

Villa Belvedereは、時閉鎖されたようだ。1911-2年12月3日付まで毎日広告が掲げられているが、何故か翌1日付から消えている。

1911-3年4月15日付 The Japan Timesは、1月20日、Belvedere Hotel (Villa Belvedere) が開業。すなわち開業の日まである。(次頁) 同じ広告が、同じ新聞の1月20日、すなわち開業の日まである。

(次頁) 同じ広告が、同じ新聞の1月20日、すなわち開業の日まである。Villa Belvedere であったころのホテルは、広告では「Private Boarding House & Hotel」などといふ。外国人の長期滞泊専用のホテルにて建設されたと思われる。広告には、丘陵、海および村(新井宿)のこゝであります)の素晴らしい眺めをほし。ままにするCommanding a splendid view of Hills, Sea & Village。(横浜・東京間に最も健康的な場所。(Healthiest location between Yokohama and Tokyo)。外国人が監督するおいしい料理(Excellent cuisine under foreign Superintendent)。安いお値段(Rates Moderate)などのキラチ・フレーズがあり。また、「ロー・テニス用コート建設中」(Racquet Range)などである。当時、大森山手といえど静かな田園地帯であったこのホテルは、東京と横浜の外国人を閑静な環境、そして料理やスホーツ

27日、29日付(各第2面)筆者の考へは「正せねばならぬ」といふ。1911-6年の新聞に「望翠樓ホテルの広告が多い。數日置きに出ている(空き)面だったたり、第2面だったりするか)。1911-5年からThe Japan Timesはほか、同じである。1911-1年(6月)、1911-3年(5月)である。(Hotel Belvedere)なく、The Hotel Belvedere(いわゆるある)。これは、大田区史の「大正12年(1923年)、同書は大正元年(1912年)まで」といふのであるから、1911-2年7月31日ないし同年末の間の開業なのかな、と思つた。ところが、1911-2年7月1日付はVilla Belvedereがある(次頁)。當時はまだ明治15年である。同年6月13日付の広告が最も古いものである。)につきまとめた(前述)

前述のように、広告文から考えて、本来このホテルは外国人の長期滞泊専用につくられたのであるが、敷地面積でいっても開業したらしい。1911-3年1月1日付のThe Japan Timesを見ると(の)のホテルの広告は見当たらない。2月、3月とマイクロフィルムを回してみたがない。1911-3年1月15日付になると、前述したように、Belvedere Hotel (Villa Belvedere) が同月20日に開業する。どうしてか出でた。(次頁) 写真も添えられているが、小ぶりで古い御紹介である。同じ広告が、同月20日まで毎日載つている。21日は休刊日であったが、22日からふたたび載るようになる。これは5月に入り(の空き)、1日付まで、毎日(今月20日)開業。(Now open from 20th inst.) である。Inst. では5月になつてはいる。確かにある。この広告文を、5月になつても修正せず使つていただけである。5月1日、広告がふたたび載るが、The Hotel Belvedere(ない)。

それはと云ふかく、Villa Ryukodere(リュコドーレ)が発足した頃の翠樓が、なぜ間もなく閉業したのかわからぬ。数ヶ月をかけて施設の拡充をはかれたといふことはあるが、どうか。

東京近郊にリゾート・ホテルをつくるという狙いはよい。広告も英字新聞に取り扱われた。しかし、おそらく1分な数の外国人を集めることができず、もとより彼等の要望にマッチしたホテルに改装したのではないか。筆者は想像する。あるいは、経営者の交替でもあつたのか。

再開されたホテルの広告を見ると、「大森駅の真向かい」(Just opposite Oji Station)、「高台に位置し、素晴らしい眺めをほしゅまむ」と、一年を通じて美しい風景に富む(Situated on high ground commanding a magnificent view, rich in beautiful scenery throughout the year)、「安いお値段、最高の施設(Moderate charges and best accommodations)」といった葱句が並ぶ。期待通りに外国人が東京や横浜からやって来たのであるが、少なくとも、

大正初期の日本の文化人がこのホテルに集まり、「このホテルを愛した」とは間違いないのであるが、外国人はどうだったのか。外国人は予定通りには来なかつたのか。

翠樓ホテルは、1923年(大正12年)9月の関東大震災後も営業をつづけた。しかし、いつ閉業したのかはわからない。ジャパン・カゼット人名録から、1931-33年の間らしい想像できるのみである。翠樓ホテルがどのように生涯を終えたのか、大田区史にもふれていないし、営業が不振であれば、ホテルとしての新聞廣告もひんぱんに出す訳にいかないであつる。

筆者は、1933年(昭和8年)10月1日、大森区山手丁子目一

辺の東西にしかなかつた山手の山上の側(西口)にななく、こちら側に住み付いた人々に不便であった。彼等は1906年(明治39年)、但楽部(だらくぶつ)を結成、2千円を集め駅に提供、これで山手側に待合所ができたといふ。

さて、読売新聞は、この「但楽部」は1939年(昭和4年)社団法人となり、初代理事長が清浦半吉であつたといふ。社団法人になる前の但楽部は、ときには翠樓ホテルで集まり、会議を開いたり、食事を楽しんだりしたのであらうが、大森庄の谷よりあつて出来たとしても、あるいは庄の会からこの但楽部に移つたメンバーもいたかも知れない。

大森山手上には、すでに上流社会が出現しており、翠樓ホテルのような施設を利用したことであろう。読売新聞は、大森生まれの大田区助役(当時)・志村金松氏の「天気のよい日は、確かに房総の山々も望されまた」という回想を伝えているが、昭和のはじめまでは、このような、すばらしい眺望を楽しめる高台に、閑静な高级住宅が散在し、ホテルがあつたのである。ホテルだけではない、料亭などもある。1888年(明治11年)に造成された大森八幡園(3万3千平方メートル)の科学はよくに有名であったが、大正の木に姿を消した。時期的に見れば、翠樓ホテルほどの料亭に取つて居わるようにならざるを得ないのであらう。

東京市心や横浜に住む日本の上流社会の人々や外国人は、翠樓ホテルのよろこびを楽しみ、おいしい料理を口にしたり、テニスやライフル射撃に興じるところができる。現在、都心からの距離にこのような施設があるたゞ、ふとぞえ、みるだけに楽しむ。

9-10番地で生まれた。現在の住居表小法では、大田区山手丁子目19番地である。筆者の両親は、結婚後しばらくして住んでいたが、1933年のはじめ、大森駅西口に近いあたりに引越して来て筆者が生まれたのである。母親は1913年(大正2年)7月の誕生であるが、まだ健在で記憶力が強い。筆者に対し、数年前はつきりと「山手に移ったとき(1933年初頭)翠樓ホテルなぞなかが生まれたのである。母親は1913年(大正2年)7月の誕生であるが、まだ健在で記憶力が強い。筆者に対し、数年前はつきりと「山手に移ったとき(1933年初頭)翠樓ホテルなぞなかが生まれた」と「誕生」した。たしかに、この程度のことなら、80歳を過ぎてじつまが記憶しているのである。しかし、ホテルがいつ閉業したか、それ以上正確なことはわからない。今まである。1931年(昭和6年)か1932年(昭和7年)か、どちらかな。と想像するのみである(母親の記憶力を信し、「付表」では閉業日を「1931年または1932年」付けさせていた)。

15

すでに述べたことであるが、大森山手上は、翠樓ホテルが営業していた。すなわち1912年(明治15年)から1931-2年(昭和6、7年)の期間、レイン(1923年(大正12年)-9月の関東大震災までは、本当に静かな山岡地域であつたらしく、これは大田区史を読んで想像できるのであるが、たまたま1912年(昭和6年)9月22日付読売新聞の都民版に山手についての記事が載った。20年以上前の記事であるが、それまで「發展性のない、難然とした眠ったような町」といわれたこの界隈が、少し手つ變ぼうを見せているという。

大森駅は1876年(明治9年)の開業であるが、待合所は東京

しかし、外国人はしもかく、大正時代といえば、一流の日本人を除けば、このようなりクリエーション施設を思うように利用する人はまだ少なかつたのである。

大正時代はももろん、長い昭和時代も終わつた。20年以上前、昭

和の末期に「發展性のない、難然とした眠つたような町」といわれる大森も、その後は目覚めたのである。われわれた大森も、この後は目覚めたのである。

現在、大田区山手丁子目1号にホテルモントレ山手がある。

ブルーガイド編 全国ホテルガイド(宝文館、1996年)を見る

と、大田区には計15のホテルがある。

6

1912年(明治15年)1月2日The Japan Timesは、翠樓ホテルの広告を探しをしたのであるが、同紙には、東京や横浜にあった他のホテルも広告を載せてゐる。日本各地のホテルもしかりである。この点について述べみたい。

1912年(明治15年)1月2日The Japan Timesは、翠樓ホテル(Villa Ryukodere)の広告は依然として載っていない。1月2日付を見ると、その第2面に帝国ホテル、東京ホテル(1901年)とある。「ホテル愛宕館」といつた、かつて横浜のグランド・ホテル、箱根宮ノドの富士屋ホテル、日光の金谷ホテル、日光ホテルおよび然海ホテルが広告を掲げている。1月19日付から築地精養軒ホテルが加わり、東京にあつた3つのホテルが広告を載せた。6月15日付には鎌倉の海浜ホテルの広告が、6月22日付から敦賀ホテルの広告が加わる。そして、前述のように、6月13日付で

Villa Ikedaの広告がはじめて載るのである。くり返しになるが、Villa Ikedaの広告は同年12月1日付から載らなくななるが、12月8日付から日比谷ホテルの広告が載りはじめる。筆者はこのホテルの開業を1913年(大正2年)7月と見ていたが、実際には1912年(大正元年)12月であつたのである。(付表)ではそのよう改めである。

1913年に入ると、The Japan Timesの3月20日付から静岡の大東館ホテルが広告を出しはじめる。同年1月20日から、個々のホテルが広告を出すことが少くなり、日本ホテル協会の会員ホテルのリストが載るようになる。皆既(東京)は帝國ホテル、築地精養軒ホテルおよび東京ホテルがこのリストに載っている。広告を出しているホテル、熱海ホテル、日比谷ホテル、伊香保温泉ホテル、またシーナン中のみ軽井沢の万平ホテルは、当時は非会員ホテルであったのか。

このようなに、英字新聞もホテル史の資料となり得る。いずれ、The Japan Timesがこの組織的に閲覧するに至りたいが、もちろん既に載りはじめたからといいて、ホテルがそのとき開業したと判断するのは禁物である。同様に、広告を出さざるなつから閉業したとは限らない。もちろん、閉・開業について記事になれば、それは信頼に足りる情報であるが、そのような記事は出ないことが多いであろう。

かくしてわかつに信じられない忌句が広告に載るこゝがある。前述のように、築地精養軒はThe Japan Timesで「1912年1月からは」(付表)に載せるところとなるが、もちろん同ホテルがそのころ

月25日、「1912年1月25日、またガーラ、ヤード、ベスとの関連で、1912年1月から新規的に發表した」として「1912年2月、10月および12月分を参照された」とある。

初期の流レストラン(和洋風を問わず)も新聞・雑誌によく広告を載せたので、歴史研究上の貴重な資料となる。筆者は1912年ころからのThe Japan Timesを閲覧したが、その目的は望學樓ホテルの広告(探してあつた)、レストランやカフェの広告もあつた。1912年、銀座のRestaurant Francaisがあり(所有者: Cuite)、京橋南鍋町2丁目のCafe Paulistaがあつた。後者については、ブラジルのサン・パウロ州政府が後援している(Patronage)日本最初の貞のガフニである。との意句がある。1912年に入ると、1月3日付から丸の内の中央学といレストランの広告が掲げられるようになる。このうち、英字新聞からレストランの歴史をフナロードするのもやつて見たいと思つた。

(付表)

筆者は、望學樓ホテルが、「天正モクラシー」の象徴のよろに思ふ。

明治末から日本社会の各分野に自由主義・民主主義の傾向が見られるようになった。その背景には、都市中間層の増大があつた。最初は、普通選挙の実施を中心的なストラッガントする政治的自由を求める動きであつたが、これが社会・文化面での自由へと擴入して行く。大田区史の「もとより、若き衆議院たちが公私し、それが新時代の文学・芸術運動の發信地となる。望學樓ホテルの

発足したためではない。それどころか、築地精養軒の広告には、開業日、改築日が入っていることが多い。例えば、1912年1月1日付回紙の第5面を見ると、Tsukiji Seiyukan Established 1869 Rebuilt 1911とある。

筆者は本論にも、市政にも、築地精養軒の歴史について何回か研究成果を発表した。まとめるならば、(1)精養軒は1872年1月3日、明治5年2月26日馬場先門前で開業したが、その日に焼失した。(2)同年6月(?)、本挽町5丁目3番地で再開。(1872年6月20日)明治5年5月15日付の「新真事記」に広告が載っている。(3)1873年(明治6年)、采女(原)に建物を新築。ここに移る。(4)1876年(明治9年)6月、ホテル併設につき許可を得た。(5)改築のため1912年(明治10年)精養軒を取(こわ)、新館が1909年(明治12年)1月落成。(6)間もなく新館の増改築に取りかかる。(7)1912年(天正元年)後半に完成した、らしいものであり、開業が1869年、改築が1911年」というデータは(?)からも出でない。しかし、レストランではなく、ホテルとしての歴史に限るならば、築地精養軒ホテルは1876年(明治6年)に正式許可を得て、(8)1877年(明治7年)采女(原)に建物を新築。ここに移る。(9)1876年(明治9年)6月、ホテル併設につき許可を得た。(10)改築のため1912年(明治10年)精養軒を取(こわ)、新館が1909年(明治12年)1月落成。(11)間もなく新館の増改築に取りかかる。

【注】築地精養軒に関し、本誌に載せた研究は、岩倉具視との関連で1992年1月、12月号、ヤン・レツルの関連で1993年1月号、(付表)でも筆者の研究成果に基づく日付を書き入れた。したがって、築地精養軒ホテルの広告にあるデータは到底採用できない。(付表)でも筆者の研究成果に基づく日付を書き入れた。

【注】築地精養軒に関し、本誌に載せた研究は、岩倉具視との関連で1992年1月、12月号、ヤン・レツルの関連で1993年1月号、(付表)でも筆者の研究成果に基づく日付を書き入れた。

「人森庄のひはそのつてあつた

いかにせん、現代とは異なり、ホテルを利用し、宿泊したり、食事をしたり、レクリエーション施設を利用したりして、つきつきの時間を使ひすと、いは習慣は、明治末から大正の日本には、東京である。しかも、般の人々の間でまだ根付いていなかつたし、在日外国人の数も少なかつた。望學樓といよりブリート・ホテル・タイプのホテルが成功する素地はまだほんとうできていなかつたのである。狙いはほかつたし、實際に、このホテルを愛した日本人・外団人は相当数いたのである。しかし、時代に先行し過ぎたものもある。それが、望學樓ホテルについて残された証跡がきわめて少ない理由である。人森区史も、人森庄の会にについて述べたのであって、ホテルそのものを取り上げた訳ではない。1933年(昭和8年)に刊行された経緯(義應はか編)人森区史(東京市大森区役所)にいたつては、望學樓ホテルについて残された証跡がきわめて少ないものである。望學樓ホテルは、日本のホテル史では影の濃い存在ではなかつた。争名は、「この日付を承るより前、ホテルの先駆者として、望學樓ホテルは承るに相違ない」といふのではなかろうか。

付表の日比谷ホテルのね、東京ホテルと改称が1912年(大正元年)12月以前の発足(?)だつたのは、説明を加えたおもたい。争名は、「この日付を承るより前、ホテルの先駆者として、望學樓ホテルは承るに相違ない」といふのではなかろうか。

日本国会セミナーか、明治大名辞典、十一ト用意したが、これ

は一九一九年（明治15年・大正元年）、中央通信社が上梓した「現代人名辞典」を底本としたものである。明治人名辞典、下巻は一九八七年（昭和62年）刊であるが、筆者は同書一巻の部26ページに、

日比谷ホテル専務取締役の菊沢亀一郎氏についての記事を見付けた（写真が添えられている）。

菊沢氏は一八七六年（明治9年）1月10日、愛媛県に生まれ、上京して日本大学を卒業、2、3の会社に勤務したとのことであるが

明治人名辞典によると、大正2年7月同志と共に麹町區有樂町壹丁目三番地に株式會社日比谷ホテルを創立して取締役となり専ら之が經營施設の任に當る同社の拂込資本金は五萬圓にして中島亮介河村吉藏と共に取締役となり松村義村山保次監査役となり日に隆

運に向ふ」という。

株式會社日比谷ホテルが創立されたとき、ホテルが開業したことは限らない。むしろ、開業はしばらく経過してからであろうといへば建物を建設してから開業する場合は、しかし、石の記事では開業の

時期は書いていないので、会社設立時をもって開業日とするのも、一つの考え方であろう。

しかし、「The Japan Times」には、日比谷ホテルの店舗が一九一四年（大正元年）12月8日付から出ている（第5面）このホテルは、

明らかに一九一2年12月またはそれ以前から営業していたのである。

それでは、石の「明治人名辞典」下巻にある記事は何を意味するか。

筆者は次のように考へる。日比谷ホテルは、一九一2年12月8日付の新聞に広告が出ている以上、この日またはその少し前に開業したと見るべきである。しかし、おそらく最初は個人営業で、翌一九一3年7月、株式會社に衣替えしたのではないか。一九一2年

（明治45年）9月2日付から出ている（第5面）このホテルは、

明らかに一九一2年12月またはそれ以前から営業していたのである。

筆者は次のように考へる。日比谷ホテルは、一九一2年12月8日付の新聞に広告が出ている以上、この日またはその少し前に開業

したと見るべきである。しかし、おそらく最初は個人営業で、翌一

9年7月、株式會社に衣替えしたのではないか。一九一2年

（明治45年）9月2日付から出ている（第5面）このホテルは、

明らかに一九一2年12月またはそれ以前から営業していたのである。

（明治45年）9月2日付から出ている（第5面）このホテルは、南小田原町3丁目で創業した。しかし、一九一2年1月3日（明治45年3月26日）の「銀座の大火」で焼失したときは居留地18番にあった。翌年に再建されたとき、場所は新栄町5丁目6番地であった。しかし、1875年版 The Chronicle and Directory の329ページは次のようになっていた。

Hotel des Colonies No.18

E. Ruef

A. Michel

すなわち、経営者のリュエルは、一九一2年（明治7年）ころ、ホテルを新栄町5丁目から旧所在地の居留地18番に移ったと記載されるのである。

それでは、オテル・デ・コロニー（再建）はいつ閉業したか。筆者は、これまで一九一7年（明治10年）以前と考へていたが、もう

付表について、なお一、二の点を付け加えた。

(1) オテル・デ・コロニー（ラベンチ・ホテル）は、南小田原町3丁目で創業した。しかし、一九一2年1月3日（明治45年3月26日）の「銀座の大火」で焼失したときは居留地18番にあった。翌年に再建されたとき、場所は新栄町5丁目6番地であった。しかし、

1875年版 The Chronicle and Directory の329ページは次のようになっていた。

*

*

*

*

それ以前まで営業していた（ホテル名を変更したがままだ）そうでなければ、ホテルは同年6月またはそれ以前、同年前半といつてもいいであろう。閉鎖されたことになる。いずれにせよ、一九一2年までの営業であった。付表に「一九一2年閉業」と書き込んだ理由である。

(2) 1903年版 The Japan Directory の118頁、159頁、160頁の間に、やはり付表に載っているオテル・サン・トーラの店舗がある。

当時はドゥートルリーニュ夫人 (Mme. L. Dutreilgne) が経営であった。外国人名録にはホテルの店舗が多く、これも貴重な情報源である。

それはとにかく、ドゥートルリーニュ夫人はフランス人であったか、一九一0年（明治43年）5月18日、ホテルはアメリカまたはイギリス国籍と見られるウリアムズ夫妻 (Mr. and Mrs. Irvine Williams) の手に移り、ホテル名は織りは同じであるが、オテル・セント・トーラ」と発音されるようになり、さらに「セント・トーラ・ホテル」となった。このように、ホテル名少なくともその発音が、経営者の交替などに伴って変わることがあったのである。

(3) ホテル愛宕館が「東京ホテル」となったのは、一九〇一年（明治37年）である。築地居留地にも東京ホテルがあり、また日比

谷門見付にも同名のホテルがあつたので、3つ目の「東京ホテル」ということになるが、いずれも営業時期はすぐれている。各地に似た例があつたと思つが、やはり同じ名称のホテルが同時に存在する」という事態は都合が悪いのである。

ライゲンが18番をホテル用に入手し、「カアンホーベンボルフ」が引き継いだのであれば、オテル・デ・コロニーは一九一2年12月か

12月、一九一2年2月、一九一5年2月、10月、11月の掲載参照)

菊沢氏は一八七六年（明治9年）1月10日、愛媛県に生まれ、上京して日本大学を卒業、2、3の会社に勤務したとのことであるが

明治人名辞典によると、大正2年7月同志と共に麹町區有樂町

壹丁目三番地に株式會社日比谷ホテルを創立して取締役となり専ら

之が經營施設の任に當る同社の拂込資本金は五萬圓にして中島亮

介河村吉藏と共に取締役となり松村義村山保次監査役となり日に隆

運に向ふ」という。

株式會社日比谷ホテルが創立されたとき、ホテルが開業したとは限らない。むしろ、開業はしばらく経過してからであろうといへば建物を建設してから開業する場合は、しかし、石の記事では開業の

時期は書いていないので、会社設立時をもって開業日とするのも、

一つの考え方であろう。